

## 「いじめの憂鬱」

曾我 唯香

いじめ、それは一番リアリティがあって、リアリティがないもの。身近で起きて遠く感じるものだと私は思っていました。この本、「いじめの憂鬱」を読むまでは。

「いじめの憂鬱」の文では筆者である池田晶子さんは、いじめ、それからいじめによって命を絶ってしまった人の理由について書かれていました。筆者は始めに「いじめ」というのはどういうことなのか分からないと綴っていました。池田さんが子供の頃、いじめはなかったといえます。昔あったいじめとは男の子が好きな女の子の髪を引っ張ったり、ちょっかいを出す程度でした。でも時代が変わって行くとともにいじめも変わって行き、今では弱いものを苦しめる行為にまで変化しました。「強い者は弱い者をいじめ、強い者は勝者であり続ける。」それが今の時代の社会が引き起こした悲劇であると私は思いました。

いじめは池田さんが述べたように今と昔では大きく違います。昔のいじめはからかうという感覚で長くは続かず、いじめられた側も乗り越えられるいじめが多かったです。しかし現代では集団でいじめ、大勢で一人を標的にし、いじめます。筆者は現代のいじめ方について、卑怯であると言っていました。なぜなら自分一人では不安なため集団で行動し、相手をいじめるからです。いじめの側が一人になったら権力を失い何事もできませんが、一緒にいじめを行う仲間がいると仲間に吊られてよりいじめを行いやすくなります。もしいじめる人たちは大勢ではなく相手と一対一になったとき強い者も強くなり、弱い者も弱くなるのではないのでしょうか。その時いじめはなくなるのだと思います。しかしインターネットが普及した現代では学校だけでなくネット上でのいじめも増加しています。そのためいじめがなくなるのは当分難しいと思います。よく本や映画などで見るいじめのきっかけは名前や見た目が変わっている、性格がみんなとは違う、障害を持っているなどです。つまり「普通とは違う」、「他が持っている物を持っていない」などです。これらの理由は全部自分自身では変えられず、それをいじめのきっかけにするのは卑劣です。人はみんな違って当たり前です。私達にはそれぞれ個性があり、それが人の素晴らしさです。しかしその個性こそがいじめの標的にし、人を苦しめてしまいます。

今では多くのいじめはどんどんエスカレートして行きます。このような場合いじめられた人はいじめられていないことを教師にも親にも打ちあけられず、一人で抱えてしまう人も少なくありません。中には、命を絶ってしまうような人もいます。

池田さんはいじめられて自殺してしまった人は、自殺は逃避ではなく、抗議の手段であると言っていました。でも私には抗議でも逃げ道でもないと思いま

す。いじめられた人にとって自殺が最後の助けだったのでは無いかと感じます。自殺する事は良くない形に思われがちですがいじめられた事で自殺した人はある意味救われたのではないかと思えます。

またもう一方の考えでは、私は自殺する行為がいじめた人への抗議だったとしても、命を絶つ他に選択肢は必ずあると思っています。たとえいじめられたとしても強い意志を持つことが大切だと思います。辛い日々が早く過ぎ去ることを願うより行動に移し誰かに話すべきです。いじめられることは決して恥ずかしいことではありません。もう少し素直になればきっと人生は明るく楽しくなると思います。しかし、私には実際のところどちらの意見が正しいか分かりません。真実は自殺してしまった本人しか分からない事なのかもしれません。

私は幸いなことにいじめられた経験もなければ、他人をいじめた覚えもありません。しかしいじめは学校だけではなく、家庭内や社会に出てからもあります。現代社会を生き抜いていく中では人とのコミュニケーションが大切です。上手くコミュニケーションを取れない人はいじめの対象になりやすい傾向があるとされています。だから私はこれからこのいじめ問題に関心を持っていますかと思っています。

私はいじめというものをどこか他人事のように思っていました。でも実際私の周りに助けを求めている人がいるかもしれない。私は池田晶子さんの文章を読んでいじめについてより深く、真剣に考えるようになりました。もし私の身近で助けを求めている人がいれば、じゃれ合っているだけだろうと目をつぶらず、私は迷わず話しかけて聞いてあげたいと思います。

最後に、イタリアの詩人ピットーリオ・アルフィエーリは自殺についてこう言っています、「時に勇気への試練となるのは、死ぬことではなく、いきることである。」

つい最近、私の友達の一人は理由がわからないまま自殺してしまいました。生きていたらこの言葉を伝えたかったです。皆さんには彼の言葉を忘れないで生きて欲しいです。